紀伊・房総

くろしお物語 ◇33◇

加太旧市街地と修験道

絵と文・熱田親憲　題字・熱田秦華

自然の恵み 育む暮らし

和歌山市加太で、淡嶋神社前の旅館・大阪屋ひいなの湯の裏を通る道から旧市街地を散策した。両側に昔からの白壁の土蔵を大切にコンクリート壁で囲った邸宅、屋根付きの門構えの中、丁寧に剪定された旧宅などが並んでいた。昔の長老格を思わせる「利光」「幸前」「小島」などの表札が何軒かあり、今日の繁栄の礎になっているようだ。

間もなく、右側に行者堂に登る阿字ケ峰入り口の碑があり、170段の石段を上ると質素なお堂が残されていた。修験者たちがここで仮寝して、明日からの友が島修行の心の準備をしたとのこと。旧市街地には、今でも各地から集まる聖護院修験者を一手に迎える「迎えの坊」向井家や一行の参拝を受ける加太春日神社が現存している。神社の隣には称念寺があり、利光家、幸前家の先祖代々の墓が並び、繁栄の歴史を思わせられた。

帰り路、空腹を覚えて「加太えびすや」ののれんをくぐる。わかめうどんを注文した。思わず「おいしかった」と声を上げると、女主人の幸前友利子さんが現れた。「加太自慢の若布で、天然ものです。種類も多いですよ」という。天然ものといえば、加太は鯛の一本釣りが名物だと聞いた。幸前さんによると、加太の鯛釣りは大型船を使わず、竿による一本釣りにこだわる漁法で、釣り上げても1日は水槽に泳がせて、鯛のストレスを解くのだとか。漁協には、一本釣りのうまい漁師を育てる「研修コース」もあるとのこと。

ここで幸前姓のルーツを尋ねてみた。出身地の奈良県斑鳩町幸前の地名にちなみ、室町時代に加太に出てきて塩田を開いた一族だという。脈々と続いた理由を「大昔のことは良く分かりませんが、加太の恵みを大事に育ててきたからではないでしょうか」。女主人の言葉に、快い響きを感じた。

宿に戻り、加太の天然主義、一本釣りした鯛のストレスを解消する発想はどこから来たのかと考えた。修験者には自然に宿る神霊を拝む入峰修行がある。その中に、木食行といって栽培された穀物を絶ち、山野の木のみを食料とする行がある。これに倣って漁師も自然の恵みを大切に、天然の魚を生活の分だけ獲ることを義として、一本釣りが定着したのではと推論したが、如何なものだろうか。加太は修験道と縁が深く、大きな漁船もなく、防波堤には小学生による竜宮城を思わせる絵画が描かれ、町ぐるみで海を大切にしているところだなと感心しつつ、加太を後にした。